

言葉の壁の前で

わたしは今、言葉の壁の前でジレンマを久しぶりに味わっています。オーストラリアで英語の勉強をはじめて三か月になりますが、まだまだ思うようにうまく話せません。表現のできないもどかしさや、周りの人の言葉を理解できない苦しさを味わう中で、時折自分が小さな子供のように思われて、情けなくなる時があります。

けれども新しい世界に入り、言葉を獲得してゆくという経験は、新しい多くの気づきをわたしに与えてくれています。今回わたしは言葉が分らない苦しきを通して、小さな子どもがよく見せる「癩癩」とは何なのかがよくわかりました。

癩癩をおこしている子供は地団太を踏んだり、怒って泣き叫んだりたりします。けれどもそれが何を訴えているかが分らないために、大人は子供に向かって、「どうしたの？わがまま言っていないでちゃんとしなさい！」と叱るのです。けれども本当のところ癩癩とは、思っていることが確かにあるのに、それを言語化できないという「言葉」を欠くところからくる、言い表しようのない気持ちの爆発なのです。もし言葉にできるものなら、もともと癩癩などおこさないでしょう。だから大人が「ちゃんと言いなさい」と頭ごなしに叱るのは、大きな誤りなのです。

思っていることを言葉で伝えられない、というジレンマは、他に比べることができない何か特別な苦しきが伴っているようです。それはわたしに「言葉」について改めて考えさせるきっかけとなりました。わたしたちが当たり前のように話しているこの言葉とは、一体何なのでしょう。言葉について考えてみる時、わたしにとってシンボルとなる人物がいます。それは見えない、聞こえない、話せないという三重苦を負っていたという、あのヘレン・ケラーの姿です。

ヘレンが初めて「水」という言葉が何を意味しているか悟った時、彼女は雷に打たれたような驚きを味わったと言われています。それは今までの混沌とした暗闇から、一転して光の世界の扉が開くような出来事だったのです。この期を境にヘレンはむさぼるように言葉を獲得してゆき、幼少期の癩癩をおこしてばかりの「野獣のような」少女から、世界の偉人へと成長してゆきます。

ヘレンが教えてくれるように、言葉の獲得はそれほど大きな転換を人間に与える出来事なのです。一つ一つ時間をかけて言葉を正しく獲得してゆくことは、なんと骨の折れる仕事なのでしょう。けれども苦勞を伴う作業にかかわらず、わたしたちは誰もがその課題に取り組めます。それは、言葉がまさに人間の精神の礎となるものだからではないでしょうか。言い換えるなら、わたしたちの精神は根本的に言葉に向けて開かれており、言葉を求めているのです。

英語の単語を一つ一つ追いながら、わたしは今少しずつ「開かれてゆく」喜びも味わい

はじめています。わたしの内面性のうちに、いままでなかったところに扉が開かれ、新しい世界とのつながりが生まれようとしています。まだまだ先の遠い道のりですが、その先に待っている展望に、わたしは希望を抱いています。

シスター岸 里実